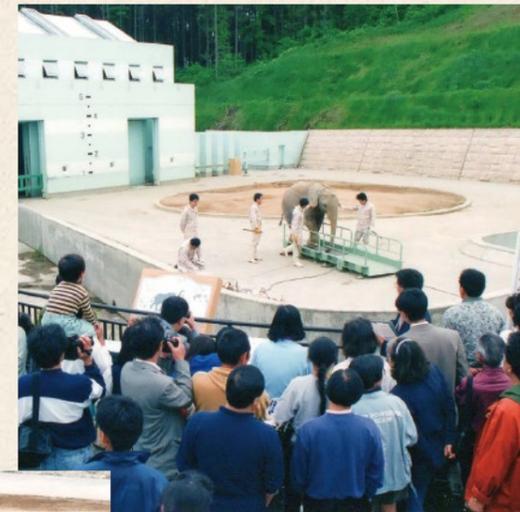




アフリカゾウ 来園25周年



子ゾウから大人のゾウへ

「だいすけ」の右牙が歯のヒビから入ったばい菌が原因で化膿し、何度も治療したこともありましたが、2頭はおおむね順調に成長しました。人間同様に、動物の健康管理のため体重管理は重要です。そこで、1991年の小さい頃から体重測定を行っていました。ゾウは生まれた時すでに約100kgほどあり、一年で約300kgほど増えるといわれていますので、人間用のヘルスメーターではとても測れません。そこで1000kgまで測れる牛馬用台はかりを2台使用しました。「花子」の体重は1993年6月には1086kg、

1995年6月には1627kgでした。1997年1月には2000kg以上と予想し、トラック用の重量計測器で測ったところ、1850kgでした。予想よりは少なかったものの、順調な体重増加が見られました。

「だいすけ」は残念ながら何度練習しても体重計に乗ってくれず計測できませんでしたが、「花子」以上に大きくなっていました。

特集

今年は、アフリカゾウが秋田市大森山動物園に来て25年目という区切りの年です。

ゾウはご存知のとおり人気の動物です。当園で開催しているサマースクールに参加した小学生に、25年以上前にアンケートを実施したところ、「今後見たい動物」の上位に必ず上げられていたのがゾウでした。

その後、秋田市制100周年事業の一環としてゾウとキリンの導入が決定し、1989年に大型動物舎の建設が始まりました。1990年秋、当園にゾウがやって来て25年。この間に起こったさまざまな出来事を、一番間近で見てきた担当者たちが振り返りながら、将来についても目を向けます。

来園

1990年9月30日、南アフリカ共和国のクルーガー国立公園より待望のアフリカゾウが来園しました。野生由来のオス1頭メス1頭で、どちらも当時体高約1.2m、体重約400kg、推定1歳でした。来園が予定よりも半年ほど早まったため、ゾウ舎がまだ完成しておらず、現在のラクダ舎を一部改造して仮住まいしました。最初は環境が変わったため飼育担当者を



警戒している様子でしたが、時間の経過とともに慣れ始め、飼育担当者にミルクや餌をねだり体を触らせるようになっていきました。1991年3月11日には新築し

たゾウ舎へ引っ越しました。4月1日の春開園日から一般公開し、5月5日には公募により愛称が、オスは「だいすけ」、メスは「花子」に決定しました。

トレーニング・直接飼育から準間接飼育へ



ゾウを飼育するには、健康管理のためのトレーニングが大変重要で、ゾウが当園に来てから始めました。

ゾウは、足の蹄が伸びすぎたり足の裏の皮膚が厚くなりすぎたりするとヒビ割れてしまい、その部分から感染症を起こして歩けなくなったりするため、足のケアなどを行っています。

また、健康状態のチェックや妊娠判定のため、採血して血液検査もしています。それらを行う場合、ゾウは体が大きく力の強い動物ですので、小さな動物のように網で捕まえ人の力で押さえたりすることはできません。そこで、人の合図に従い体の向きを変えたり足を上げたりできるようにトレーニングしています。

このようなトレーニングをゾウと同じ室内(空間)に入って行うことを直接飼育と

いいます。一方、ゾウとは同じ空間に入らず柵越しに接触して行うことを準間接飼育といいます。大人のオスゾウはマストと呼ばれる繁殖を伴う危険な時期があるため、動物園では、子ゾウのうちは直接飼育で管理しますが、ある程度の年齢になると飼育員の安全を考慮して準間接飼育に移行するのが一般的です。

当園でも、ゾウ来園以来直接飼育で管理してきましたが、成長に伴い、1999年から準間接飼育に移行しました。準間接飼育の場合、直接飼育に比べゾウとの距離が遠くなるため、体のケアはしづらくなります。以前と同様のトレーニングができなくなる不安がありました。トレーニング手法を変えたり、部屋の一部を改造することで、現在は以前と同様かそれ以上の足のケアや健康管理ができています。

牧草の共同栽培

当園ではゾウの糞で堆肥を作り、その堆肥を利用してゾウが食べる牧草を栽培しています。1999年からは地元の秋田市立浜田小学校と共同で栽培を始めました。毎年、5月に児童と共に種を播き、7月には大人の背丈ほどに成長した牧草を児童が収穫します。収穫した牧草を運び、児童一人一人の手からゾウに直接与えてもらっています。児童が自然の循環について学び、考える良い機会になっています。



1991年



2011年

みるみる大きくなりました!

ゾウ舎の外壁には高さを示すメートルの表示があります。1991年当時と2011年の写真を比べると大きさの違いが一目瞭然。この20年の間に体重は約10倍ほどにまでなりました。



ゾウといっしょに飼育担当者も成長しました!

1992年から担当していますが、ゾウは私の先輩になります。来園当時推定1歳だった2頭も今年で推定26歳になりました。これからもゾウの成長を見守りながら精進していきます。

飼育担当者から

山上昇 これまで、大小さまざまなケガや病気を乗り越えて今日に至っていますが、これからも大森山動物園で最初に思い浮かぶ動物になってもらえるよう、1日を大切に2頭と共に歩んでいきたいと思っています。

西方理 だいすけと花子が病気やケガをせず、長生きし、近い将来二世が誕生するように努力していきたいです。

はなスポット

2013年に無人餌やり施設「ゾウとはなスポット」がオープンしました。それ以前にも土日限定でまんまタイムやエサやり体験を実施してきましたが、ゾウをより身近に感じてもらう魅力を伝えようと外展示場に新たに設置しました。ゾウの鼻に直接餌を与えることができ、ゾウの実際の大きさをすぐ近くで体感できるため、お客さまから「すごく近くて迫力がある」と大変好評です。



現状と未来

1930～1940年代にはアフリカ大陸に500万頭ほどいたアフリカゾウが、象牙目的の密猟などにより現在は50万頭程度まで減少しているといわれています。

日本の動物園でも最盛期には68頭のアフリカゾウが飼育されていましたが、ゾウの繁殖は難しく、また高齢化が進み、2013年には39頭に減少しました。このままの減少が続くと、2030年には日本に7頭しかなくなるという心配な予測数字も出ています。

「だいすけ」と「花子」は今年推定26歳

になりました。お客さまに「赤ちゃんが生まれないの?」と聞かれることがよくあります。2頭の相性は良く、交尾時折見られますが、未だ二世誕生には至っていません。小さい頃から2頭だけで兄妹のように育ってしまったことが影響しているの

かもしれません。ゾウの寿命は60年ほどですが、メスの繁殖可能年齢は30代くらいまでといわれています。これから10年が大事な時期です。二世誕生に向け、さまざまな研究機関や動物園同士協力しながら努力していきたいと思っています。

國井博 だいすけと花子がこれからも皆から愛されるように頑張っていきたいと思っています。

堀籠麻子 だいすけの恐がりっぷりも花子のやんちゃっぷりも見ている飽きません。この2頭の子ゾウも見たいので、ゾウ夫婦と一緒に努力します。

山本明子 今年度から大森山動物園で働いています。だいすけさんと花子さんにとって、信頼できる担当者になれるように頑張りたいです。

鼻のケガ

2006年10月10日に「花子」が鼻先を10cmほど切断する大けがをしました。夜間のことで原因がはっきりと分かりませんが、「だいすけ」とのトラブルか係留チェーンに挟まってけがをしたようです。鼻先の指状突起といわれる部分がなくなってしまい、小さい物をつまむような餌の取り方はできなくなってしまうのではないかと心配しましたが、数日で器用に粉状の餌も鼻で巻くように持って行って食べることができるようになりました。生活にはほとんど支障がなくほっとしています。



疝痛（せんつう）

「だいすけ」が今年5月2日より原因不明の疝痛（せんつう）症状を起こし、食欲不振と下痢が止まらず、腹痛により座り込むことがありました。給餌量の制限などを行ったところ、数日で回復の兆しを見せましたが、ある程度給餌量を増やすと再び同様の症状を繰り返し、5月下旬までこのような状態が続き大変心配しました。その後、6月に入ると給餌量を増やしても同様の症状を起こすこともなく、現在は順調に推移しています。

※疝痛／お腹が痛くなる消化器の病気で、草食動物などに時々起きます。

